

第3の転換期を迎え、真のグローバル企業をめざします



「3つのシフト」が顕著となった2009年度

2009年度は、自動車産業を取り巻く「価値観」「市場」「製品」の3つのシフトが大きく現れた年となりました。急激な経済変動を経て、自動車に対する消費者の価値観が多様化し、環境配慮への関心が高まるとともに、市場の中心が先進国から新興国へと移行し、製品の小型化と低価格化が急激に進展しました。この厳しい状況のもと、akebonoは生き残りをかけた挑戦に取り組んでいます。2009年度は、国内拠点を再編し生産体制の最適化を行うとともに、北米地域全体におけるブレーキ生産能力の適正化と事業分野の拡大をめざして、2009年12月に独口パート・ボッシュより北米ブレーキ事業を譲受けました。業績面では、固定費の大幅削減と投資の抑制など徹底したコスト削減の実施と、アジア地域での増収増益により、業績を大幅に回復させることができました。

APSによるグローバル化対応

グローバル化を進展するためにはグループの一体感を醸成していくことも大切です。譲受けにより新たに加わった北米生産拠点とともにさらなる成長を果たしていくため、akebonoのモノづくりの考え方、さらには経営指針・経営哲学であるAPS (Akebono Production System)のより一層の活用が必要と考えています。APSは一言でいうと「永遠のムダとり」です。日々の業務に隠れている問題やムダを見つけ出す感覚を研きあげることが目的であり、その実現のためには、人づくりは欠かせません。「モノづくりは、人づくり」を念頭に、APSが異なる文化の垣根を越えるakebonoの絆になるような存在に高めていきたいと考えています。

ブレーキ事業を通じた、社会への「安全・安心の提供」

社会の一員である企業としてakebonoが取り組むべき第1の課題は、社会への「安全・安心の提供」と捉えています。これは私達が2005年から取り組んでいるコーポレートブランド

経営の原点です。エンジンが壊れても自動車は止まるけれど、ブレーキが壊れると自動車は止まらない。またFormula 1の開発では「速く走るためのブレーキ」が求められる。どちらもブレーキを通じた「安全・安心の提供」であり、ここでのakebonoの役割を追求していきます。一方で今後、工場環境配慮は不可欠であると考えています。熱加工製品設備のエネルギー効率の観点からCO₂排出量削減に取り組み、立地規制がますます厳しくなるなか製造業として日本で生き残っていくために、今後はライフサイクルアセスメントを念頭においた環境整備も進めていきます。このような考えのもと、現在30代前後の社員を中心に、環境保全も含め10年後の工場について考えてもらう社内プロジェクトを進めています。

「曙の理念」を技術開発のガイドとして

「曙の理念」では、akebonoのコア技術を「摩擦と振動、その制御と解析」と定めています。akebonoの主要製品である摩擦材は、粉体を配合し加熱成形するもので、このコア技術をさらに突き詰め、分析・研究していけば、新たな技術が開発できる可能性もあります。「曙の理念」をガイド役に、技術開発の創造力を育てていきたいと考えています。

またこの理念は、事業運営や環境保全、社会貢献を含む、akebonoのあらゆる企業活動の社会的責任を実現するビジョンでもあります。これを実現するための姿勢・行動規範として「akebono21世紀宣言」を、短・中期的な方針としてブレーキ事業を通じ社会にどのような価値を提供していくのかを「ブランドステートメント」に定め、コーポレートブランド経営を推進しています。

創業80年の歴史のなかで、1960年の米国ベンディックスとの技術提携、1986年のGMとの合弁会社設立を経て、北米ブレーキ事業を取得した2009年はakebonoにとって第3の転換期となります。ステークホルダーの皆様には、「AKEBONO REPORT 2010」を通じて、グループにおける持続的成長のあり方を多面的にご理解いただき、引き続き変わらないご支援をお願いいたしますとともに、本レポートへの忌憚のないご意見、ご感想をお寄せいただけますようお願い申し上げます。

代表取締役社長

信元久隆

